

春の苑 紅にほふ

小野寺 静子

一

万葉集卷十九の巻頭に位置する四一三九～四一五〇歌の十二首（あるいは四一五三歌までの十五首）は、家持の「越中秀吟」として名高い。その最初の歌は、春の苑の桃の花が咲き輝く、その桃の木の下に出で立つ乙女を歌い、画をみるような光景を描いて印象的である。

天平勝宝二年三月一日の暮に、春苑桃李の花を眺矚して作る二首

春の苑紅にほふ桃の花下照る道に出で立つ娘子（十九・四一三九）

春苑 紅尔保布 桃花 下照道尔 出立嬷孀

この歌は題詞に示すように次の李の花の歌と共に作られたものである。

我が苑の李の花か庭に散るはだれのいまだ残りたるかも（十九・四一四〇）

春の苑 虹にほふ

吾園之 李花可 庭尔落 波太礼能未 遺存可母

四一三九一四一五三歌の十五首は、「極めて密接な連繋によって詠まれた連作、ないしは一五首が一つの有機的構造体としてのまとまった作品と見做せるのではなからうか。」(滝沢貞男「『紅にほふ桃の花』をめぐって」『文学・語学』八六、昭五四年十二月)といった指摘からいえるように、互いに関連づけて考えていくべきものであるが、ここでは巻頭歌四一三九歌のみを対象にして、そこに歌われている世界を読み直してみたい。

一一

まず、題詞から考えていきたい。天平勝宝二年、家持は越中守として越中に赴任していた。「三月一日の暮」とかなり具体的に作歌時が明記されているが、家持の歌のみならず万葉集の歌全体からいって、その作歌時を一日のうちどの何時ころかといった形で題詞や左注に記されているものはそう多くはない。したがって、作歌時が一日の何時かといった具体的な時を明記するには、それなりの作者や編者の思惑があることといえよう。四一三九歌を読む場合、家持が「三月一日の暮」と明記した意図をくみとるべきであり、「三月一日の暮」は歌の解釈に生かして考えていくべきであろう。

家持の歌で、作歌時が一日の何時かといった具体的な時を明記するものかどうかというものがあり、かつ、それが歌にどのように反映されているだろうか。そのことを集中の家持の歌をみるなかから考えてゆく。ただし、この場合と同じく独詠的なものに限り、夜に設定されることの多い宴席での歌は除く。また「月の光を仰ぎ見て」や「天漢を仰ぎ見て」から、作歌時が夜のことといえるものに、

珠洲郡より船を發し、太沼郡に還る時に、長浜の湾に泊まり、月の光を仰ぎ見て作る歌一首

珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり（十七・四〇二九）

七夕の歌一首 并せて短歌（十八・四二二五～四二二七）

安の川い向かひ立ちて年の恋日長き児らが妻問ひの夜そ（十八・四二二七）

右、七月七日に天漢を仰ぎ見て大伴宿祢家持作る。

十年七月七日の夜に独り天漢を仰ぎて聊かに懷を述ぶる一首

織女し舟乗りすらしまそ鏡清き月夜に雲立ち渡る（十七・三九〇〇）

があるが、これらはそれぞれ歌に夜をあらわす語があり、明記された時と歌の内容との符合をみるが、当時の船出がふつう夜であったこと、七夕は星の伝説によることを考えると、作歌時が夜であるのは当然のことである。あるいは左注に「六月一日の晩頭に守大伴宿祢家持作る。」とある「天平感宝元年閏五月六日より以来、小旱を起こし、百姓の田畝稍くに凋む色有り。六月朔日に至りて忽ちに氣を見る。よりて作る雲の歌一首短歌一絶」（十八・四二二～四二二三）は公人としてのもので、独詠的なものとは言い難い。結局、四一三九歌に通ずるものとしては次の例を挙げることができる。

恋緒を述ぶる歌一首 并せて短歌（十七・三九七八～三九八二）

……しきたへの 袖返しつつ 寝る夜おちず 夢には見れど 現にし 直にあらねば 恋しけく 千重に積
もりぬ 近くあらば 歸りにだにも うち行きて 妹が手枕 さし交へて 寝ても来ましを……下恋に 思ひ
うらぶれ 門に立ち 夕占問ひつつ 我を待つと 寝すらむ妹を 逢ひてはや見む（十七・三九七八）

あしひきの山きへなりて遠けども心し行けば夢に見えけり(十七・三九八一)

右、三月二十日夜裏に忽ちに恋情を起こして作る。大伴宿祢家持

四月十六日夜裏遙かに霍公鳥の喧くを聞きて懐を述ぶる歌一首

ぬばたまの月に向かひてほととぎす鳴く音遙けし里遠みかも(十七・三九八八)

夜の裏に千鳥の喧くを聞く歌二首

夜ぐたちに寝覚めて居れば川瀬尋め心もしのに鳴く千鳥かも(十九・四一四六)

夜くたちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人もしのひ来にけれ(十九・四一四七)

暁に鳴く雉を聞く歌二首(十九・四一四八) (四一四九)

あしひきの八つ峰の雉鳴きとよむ朝明の霞見れば悲しも(十九・四一四九)

二十四日は立夏四月の節に応る。これに因りて二十三日の暮に、忽ちに霍公鳥の暁に喧く声を思ひて作

る歌二首(十八・四一七一) (四一七二)

常人も起きつつ聞くそほととぎすこの暁に来鳴く初声(十八・四一七二)

これらの「夜裏」、「夜の裏」、「暁」という、一日の何時かといった具体的な時は、実際の歌の形成や内容、作者の心情と結び合っていて、歌の解釈上、重要な働きをしているといえる。ただし、

冬十一月五日の夜に小雷起こり鳴り、雪は庭に落り覆ふ。忽ちに感憐を懐き、聊かに作る短歌一首

消残りの雪にあへ照るあしひきの山橋をつとに摘み来な(二十・四四七一)

の場合は題詞に「夜」とあるが歌にはそれをあらわす表現がなく、符号は見出しがたい。「あへ照る」は「あへ照

るらむ」のことといわれるように、家持は「山橋」の実を見ているわけではなく推量しているのである。それは夜で暗いからというより、山に自生するからという意味でのことと理解できる。この年の十一月五日は太陽暦の十二月五日ということだから、淡い月の光の中で「庭に落り覆」った雪を「消残りの雪」と表現したものであろうか。とすると、この歌の題詞の「夜」と歌の内容とに符号をみるということはできる。こうみてくると、家持が題詞や左注で作歌の時を一日の何時かということをも明記するにはそれだけの理由があり、歌の解釈や形成に大きな意味を持つのだということができよう。四一三九歌の作歌時として家持が「暮」と明記したということは、歌の解釈に際して充分考慮しなければならないことなのである。

三二

ここでは「眺矚して」と「春の苑」について考える。「眺矚」は遠くながめ見つめる。遠くまで見わたすの意味である。万葉集には、「矚」は「属」と共に「矚目」、「属目」としてもみえ、じつと目を止めて見る、注視するの意味で、物や景を見ての作歌というように作歌事情を語るものである。これらの例は、次のとおりである。

○ 一 更に目を矚けて

三島野に霞たなびきしかすがに昨日も今日も雪は降りつつ（十八・四〇七九、家持）

○ …ここに久米朝臣広縄菼の花を矚て作る歌一首

君が家に植ゑたる菼の初花を折りてかざさな旅別るとち（十九・四二五二）

○ 右の一首、少納言大伴宿祢家持、その時に梨のもみてるを矚てこの歌を作る。

十月しぐれの常か我が背子がやどのもみち葉散りぬべく見ゆ (十九・四二五九)

○ 右の一首、少納言大伴宿祢家持、時の花を矚て作る。：

山吹の花の盛りにかくのごと君を見まは千年にもがも (二十・四三〇四)

○ ここに積雪重巖の起てるを彫り成し、奇巧に草樹の花を綵り発す。これに属きて掾久米朝臣の作る歌一首

なでしこは秋咲くものを君が家の雪の巖に咲けりけるかも (十九・四二三二)

○ 右、兵部少輔大伴宿祢家持植ゑたる椿に属けて作る。

あしひきの八つ峰の椿つらつらに見とも飽かめや植ゑてける君 (二十・四四八一)

○ 右の件の歌詞は、春の出挙に依りて、諸郡を巡行し、当時当所にし、属目し作る。大伴宿祢家持

砺波郡の雄神川の辺にして作る歌一首

雄神川紅にほふ娘子らし葦付取ると瀬に立たすらし (十七・四〇二二)

婦負郡にして鵜坂川の辺を渡る時に作る一首

鵜坂川渡る瀬多みこの我が馬の足搔きの水に衣濡れにけり (十七・四〇二二)

鵜を潜くる人を見て作る歌一首

婦負川の速き瀬ごとに篝さし八十伴の緒は鵜川立ちけり (十七・四〇二三)

新川郡にして延槻河を渡る時に作る歌一首

立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬あぶみ漬かすも (十七・四〇二四)

氣太の神宮に赴き参り、海辺を行く時に作る歌一首

之乎路から直越え来れば羽咋の海朝なぎしたり舟楫もがも（十七・四〇二五）

能登郡にして香島の津より船を発し、熊来村をさして往く時に作る歌二首

とぶさ立て舟木伐るといふ能登の島山今日見れば木立繁しも幾代神びそ（十七・四〇二六）

香島より熊木をさして漕ぐ舟の楫取る間なく京師し思ほゆ（十七・四〇二七）

鳳至郡にして饒石川を渡る時に作る歌一首

妹に逢はず久しくなりぬ饒石川清き瀬ごとに水占延へてな（十七・四〇二八）

珠洲郡より船を出し、太沼郡に還る時に、長浜の湾に泊まり、月の光を仰ぎ見て作る歌一首

珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり（十七・四〇二九）

季春三月九日に出挙の政に擬りて、旧江村に行く。道の上に物花を属目する詠并せて興中に作る所の歌

洪谿の崎に過り、巖の上の樹を見る歌一首

磯の上のつままを見れば根を延へて年深からし神さびにけり（十九・四一五九）

○ 山斎を属目して作る歌三首

鴛鴦の住む君がこの山斎今日見ればあしびの花も咲きにけるかも（二十・四五一一、三形王）

本論の読みは『万葉集訳文篇』（塙書房）によったもので、他の本と異なる読みもある。たとえば、『新編全集』

（小学館）では四〇七九歌は「矚目して」とよみ、四二二一歌は「つけて」とよみ「それを見て」と訳し、四四八

一歌は「みて」とよむ。読み方に違いはあるが、「矚」、「属」、「矚目」、「属目」の例は、「…を見て」と眼

前の景や物を見ての作歌であることを語るための表現とみなして良い。

他に「属_レ物」、「因_ニ属目」、「属_レ物発_レ思」、「属目発_レ思」というのがあるが、これらは物や景を見て思いを寄せたり思いを起すといった、物や景を見ることによって思いが触発される場合に用いられる。

○ 物に属きて思ひを発す歌一首 并せて短歌

……舟泊めて 浮き寝をしつつ わたつみの 沖辺を見れば いざりする 海人の娘子は 小舟乗り つららに浮けり……大舟を 漕ぎ我が行けば 沖つ波 高く立ち来ぬ よそのみに 見つつ過ぎ行き 玉の浦に 舟を留めて 浜辺より 浦磯を見つつ 泣く子なす 音のみし泣かゆ 海神の 手巻の玉を 家づとに 妹に遣らむと 拾ひ取り 袖には入れて 返し遣る 使ひなければ 持てれども 験をなみと また置きつるかも

(十五・三六二七)

○ 右、此の夕月光遅く流れ、和風稍く扇ぐ。即ち属目に因り、聊かにこの歌を作る。

ぬばたまの夜渡る月を幾夜経と数みつつ妹は我待つらむそ (十八・四〇七二)

○ 一 物に属きて思ひを発して

桜花今そ盛りと人は言へど我はさぶしも君としあらねば (十八・四〇七四)

○ 越中国の守大伴家持の報へ贈る歌四首

一 属目し思ひを発すに答へ、兼ねて選任せる旧宅の西北隅の桜樹を詠ひ云ふ

我が背子が古き垣内の桜花いまだ含めり一目見に来ね (十八・四〇七七)

「属_レ物」、「属_レ目」、「属目」群の中にも二十・四三〇四歌、四四八一歌のようにこれに類する例もあるが、

物や景を見てそれを詠ずるか、あるいは見たものに寄せたり思いが触発され歌うものであることを意味するのが「矚」、「属」、「矚目」、「属目」、「属物」、「因_レ属目_二」、「属_レ目_一発_レ思」、「属_レ目_一発_レ思」の持つ意義である。

では、四一三九歌では、何を「眺矚」したのだろうか。題詞に従えば「春苑桃李の花」ということになるがそう言えるだろうか。小島憲之氏は、「眺矚」は初唐詩の例から「遠く眺めやる意」、「風景を遠く眺める意」で、「必ずしも家持の『春苑の桃李の花を眺矚する』ような小景ではない」という。四一三九歌に漢語の「眺矚」の例を用すると、「そこに距離的にみて、春苑の広さ、遠けさを感じられ」、「春苑乙女を桃李の花と共に一幅の構図をかまへた唐画的な情景」を遠景としてみていることを「眺矚」という語によって知ることができるという（「漢語享受の問題に関して―『万葉語』の場合―」『高野山大学国語国文』三、昭五一年十二月）。桃李の花や乙女を実景として見ていたかどうかの問題は別にあるが、「眺矚」という語によって、家持は越中守公館の春の苑、あるいは公館の苑をも越え、広く遠く眺めやっていると表現しようとしたのだろう。

題詞に「桃李の花」とあり歌に「桃の花」とあって、四一三九歌は桃の花を詠じたものである。しかし、この時越中守公館の庭に桃の花が咲いていたか問題であり、またこの歌の「桃」とはいかなる種類をさすのかも問題である。前川文夫氏は、万葉集のモモには古いモモ―ヤマモモと新しいモモ―ケモモ（後に「ケ」がとれる。今日の桃のこと）の二つの違った種類のモモが登場し、万葉の時代はヤマモモからケモモへの過渡期にあたるとする（『日本人と植物』岩波新書、一九七三年二月）。前川氏の論を受け、伊丹末雄氏は池主の「紅桃」・「桃花」も家持のよんだ「桃」もヤマモモと同じものではなからうか（「紅匂ふ桃の花―家持の四一三九番歌の背景―」『美夫君志』二二、昭五三年三月）と、自生種の「桃」を想定したが後にヤマモモの花期からこれを否定し、越中守官舎に「おそらく一・二株ずつの『桃

李』が花をさかせていたのであつたらう。『桃李』の核が都から運ばれて越中国府にあざやかな花をつけ、心ある人士をして『眺矚』させるまでさほど年月を要さなかつたはずなのである。」（「家持の『桃李花』の歌―四一三九・四一四〇の雑考」『上代文学』五一、昭五八年十一月）とした。伊丹氏はこの論で四一三九歌の「桃」を中国伝来のケモモに訂正したことになる。また、桜井満氏は「モモの木やモモの花の表現に対して、モモの実を表現するときケモモといったとみてよからう。モモとケモモは、前川氏がいう『二つの違った種類を指すもの』ではないのである。ともに桃とみてよいのだ」（『万葉のモモ』『美夫君志』四三、平三年十月）とする。このように四一三九歌の「桃」が問題になるのは、この歌が醸し出す桃の花のあでやかさにふさわしい桃の花を考えようとするからである。すなわちこれらの論は桃の花が咲いていたという前提のもとに桃を考えようとしたのである。旧暦三月一日（内田正男編『日本暦日原典』によれば新暦四月十一日。加唐興三郎編『日本陰陽暦日対照表』によれば新暦四月十五日）頃、モモにしろケモモにしろ越中国で桃は咲いていただろうか。滝沢貞男氏の「越中国の国府の庭の桃が四月十一日満開であつた事実には絶対には有り得ないことと断言してよいのではなからうか」（前掲論）という指摘のごとく、旧暦三月一日、越中国では桃の花が咲いていたとは言い難いらしい。また『釋注』が述べるように、「雪深い北の国越中にあつては、気配こそあれ、桃も李も満開という事情にはなかつたであらう。歌における桃李は、中国詩文等に基づく家持の幻想の世界に咲いた花」なのであらう。とすると、家持が「眺矚」したのは何であつたらうか。題詞をそのまま読めば「春苑桃李の花」ということになるが、「春苑」には今「桃李の花」はない。家持が確かに「眺矚」したのは、「三月一日の暮」の越中守公館の「春の苑」、あるいは公館の苑を越え遠く眺めやることのできた暮春三月の暮の景であらう。

四

万葉集の「紅」はさまざまなものを表現するのに用いられる。

秋の紅葉の彩をいうもの一八・一五九四、十・二二七七、十一・二七六三、十三・三三二七、十八・四一一一
紅（呉藍）の花から灰汁で色素を溶かし出し酢で色素定着させる、染められた色としての「紅」（譬喩に用いられるものもある）一六・一〇四四、七・二一九七・一三二二、十一・二六二三・二六二四・二八二八、十二・

二九六六、十五・三七〇三、十六・三八七七、十八・四一〇九、十九・四一五六・四一六〇
枕詞として、あるいは植物名として用いられる（染色にかかわってのもの）

一四・六八三、七・一三四三、十・一九九三、十一・二八二七
女性が身につける紅色の裳や衣の形容

一五・八〇四、五・八六一、九・一六七二、一七四二、十一・二五五〇、二六五五、十七・三九六九、
三九七三、十九・四一五七

裳という語はないが裳の形容といえるもの一七・一二一八、十七・四〇二一

顔の形容として（「紅顔」）一五・七九四序「紅顔は三従と共に長く逝き」、十七「七言晩春三日遊覧一首 并

せて序」「紅を分ち」

桃の花の色一十七・三九六七序、十七「七言晩春三日遊覧一首 并せて序」、十九・四一九二

集中の「紅」は色としての「紅」の例が多数を占める。桃の花の形容として用いられるのは、万葉集では実はそ

う多くはない。顔の形容の五・七九四序は桃の花という表現はないが、ここには桃の花の色が言外にあると見てよいであろう。それによって乙女の顔の形容がもっと具体的なあでやかさを持つわけで、大伴旅人は美しく健康的な女性の形容として桃の花の色をもってあらわしたのである。呉藍によって染められた色としての「紅」から脱し、「紅」が新たな展開を見せるのはこの桃の花の色として表現されることによつてであるといえる。古代の文献で桃は花よりも実であらわれる方が多く、古事記上巻、日本書紀神代上に邪気を払う実として出てくるほか、書紀に「桃李、実れり。」（推古二四年正月）、「活田村に桃李実れり。」（天武九年正月）と見える。また、「真珠：其の大きき、桃子の如し。」（允恭一四年九月）、「雹零る。大きき桃子の如し。」（推古三六年四月）、「氷零れり。大きき桃子の如し。」（天武八年六月）と、何かを桃の実の大きさに譬える例として用いられる。万葉集では実になることを恋の成就に譬える例（七・一三五六、一三五八、十一・二八三四）や、どのようなことを譬えたのか明確ではないが「譬喩の歌」として載る「我がやどの毛桃の下に月夜さし下心良しうたてこのころ」（十・一八八九）がある。その他に染色として「桃花染め」の例（十二・二九七〇）があるが、これも「物に寄せて思ひを陳ぶる」歌で「桃花染め」が淡紅色であるところから「浅らかに」を起こす序詞としての働きをしている。桃の花が現れるのは、書紀では推古三四年正月「桃李、花さけり。」、舒明十年九月「霖雨して、桃李花さけり。」、皇極二年二月二十日「桃の花始めて見ゆ。」と新しく、かつ、これらの例は桃の花が咲いたというのみで、桃の花の美しさを述べたものではない。万葉集で桃の花を詠ずるものに、

① 松浦川に遊ぶ序

……忽ちに魚を釣る女子等に値ひぬ。花の容双びなく、光りたる儀匹ひなし。柳の葉を眉の中に開き、桃の

花を頬の上に発く。……（五・八五三、旅人）

②

忽ちに芳音を辱なみし、翰苑雲を凌ぐ。兼ねて倭詩を垂れ、詩林錦を舒ぶ。以て吟じ以て詠じ、能く恋緒を蠲く。春は楽しぶ可く、暮春の風景最も怜れぶ可し。紅桃灼々、戲蝶は花を回りに憚ひ、翠柳依々、嬌鶯は葉に隠りて歌ふ。楽しぶべきかも。……

（十七・三九六七―三九六八序、天平十九年三月二日、池主）

③

七言晚春三日遊覧一首并せて序

上巳の名辰は、暮春の麗景なり。桃花臉を照らして紅を分ち、柳色苔を含みて縁を競ふ。ここに手を携へ、江河の畔を曠かに望み、酒を訪ひ、野客の家に適く過る。既にして、琴罇を得、蘭契光を和げたり。……余春の媚日は怜賞するに宜く、上巳の風向は覽遊するに足る。

柳陌は江に臨みて袂服を纏にし、桃源は海に通ひて仙舟を浮かぶ。

雲疊に桂を酌みて三清湛ひ、

羽爵人を催して九曲流る。……（十七・三九七三の前、天平十九年三月四日、池主）

④

霍公鳥と藤の花とを詠む一首并せて短歌

桃の花 紅色に にほひたる 面輪のうちに 青柳の 細き眉根を 笑みまがり 朝影見つつ 娘子らが 手に取り持てる……（十九・四一九二、天平勝宝二年四月九日、家持）

がある。①は旅人の太宰帥時代のものだが、これは桃の花そのものを歌うのではなく女子等の頬のあたりは桃の花が咲いたようにあでやかであると、頬の美しさを譬えたものである。遊仙窟の「頬上二花開キテ春ヲ闘フニ似タリ」、
「紅桃臉ノ新タルヲ乱ル」、毛詩の「桃ノ夭々タル灼々タル其ノ花」や六朝詩に類例があるという（小島憲之「家持ノート」『上代日本文学と中国文学』中、昭三八年一月）。この作あたりからの「桃」は、中国伝来の桃、中国詩文にあらわれる「桃の花」が背景にあつてのものとみなして良い。②は天平十九年三月二日、越中守として赴任した大伴家持が病に臥せった折、大伴池主が家持に贈った書簡中のもので、やはり遊仙窟や毛詩などのかかわりが指摘されるが、これは、春三月の風景として青い柳のしなやかな枝とともに紅の桃の花が明るく照り輝くさまを叙したものである。何かの譬えとしてでなく桃の花の桃の花としての美しさを描いたものである。池主はさらに三月四日、家持に七言詩と書簡を贈る。③の「桃の花は紅く咲いて見る人の頬までも紅く染め」（『新編全集』）は、あたかも①と②とを組み合わせたような表現であるが、やはり遊仙窟などの中国詩文とのかかわりが指摘される。④は、天平勝宝二年四月九日の家持の独詠歌である。「桃の花紅色にほひたる」は「面輪」を形容するもので、「四月九日」という日や「霍公鳥と藤の花とを詠む一首」であるということから、「桃の花紅色にほひたる」は実景ではなく観念的に「面輪」を形容するものとして詠じられたものである。そうすると四一三九歌を除いて家持の歌には純粹に桃の花が紅色に咲く景を歌ったものはないといえる。

芳賀紀男氏は②③と④の間に位置する四一三九歌は、②③を含む天平十九年春の池主と家持との贈答歌に着眼点を見出し契機となつて、池主が歌になしえなかつた桃の花の美を詠んだのだと、四一三九歌の形成に池主との歌の贈答のかかわりを指摘する（「家持の桃李の歌」『小島憲之博士古稀記念論文集 古典学藻』、昭五七年十一月）。また、

中国詩文とのかかわりも既に契沖によって指摘されるところであり、横井博氏の、四一三九番の歌作りは「中国詩文によって開かれた一種の異国趣味的観照が動因となつてゐる」（『家持の芸境』『万葉』三九、昭三六年五月）、小島憲之氏の、この歌は「玉台的世界」を持つ（『家持ノート』、前掲論）、芳賀氏の「漢詩的な眼で素材が整序され、かつ表現にもちきたされ」た（前掲論）など、この歌の形成に中国詩文がかかわつてゐること、その理解に中国詩文をとりいれていくべきであることは当り前のこととなつてゐる。こうした形成の契機や発想のあり方を考えると、家持が四一三九歌を作つた時点で桃が咲いてゐたのどうかはさほど問題とならない。が事實はどうであれ桃の花が咲いてゐる光景を歌つてゐることも事實である。中西進氏は四一三九歌は家持の『くれなるの時代』の産物で、この中に聳立する絶唱だつたとする。「くれなる」はうつろいの形象ともいう（『くれなる―家持の幻覚―』『文学』三五―六、昭四二年六月）。この「紅にほふ」という表現は咲いてゐる桃の花のこととして疑われることはないが、桃の花にうつろいの形象のイメージはあまりない。「紅にほふ」と桃の花を結びつけることは考え直して良いのではなからうか。

「にほふ」は表記「丹穂」から考えると、もともとは赤い色に照り映えるの意味であろうが、「花が美しい色に咲き、葉がもみじする」、「他のもの（土・花など）の色が映り染まる」、「美しい色彩に輝く」（『時代別国語大辞典 上代編』）などとしても用いられる。四一三九歌の「紅にほふ」を除く集中の「紅にほふ」、「紅ににほふ」は、海の色（大宮人の裳の色）（七・一二二八、十七・四〇二二）、もみじの色（八・一五九四、十三・三三二七、十八・四一一一）、桃の花（十九・四一九二）と多様である。その中で集中の次の「にほふ」の用法は、四一三九歌を理解するうえで参考になる。

田部忌寸様子、大宰に任ずる時の歌四首

朝日影にほへる山に照る月の飽かざる君を山越しに置きて(四・四九五)

この「にほふ」は、「朝日の光がさして輝いている」(『新編全集』)と、朝日の光の輝きをいうのである。「にほふ」は日の光の表現として用いられているのである。「日」の枕詞として「あからひく」(四・六一九)、「あかねさす」(二・一六九、一九九、六・九一六、十二・二九〇)があるが、それによると日の光は赤色、茜色ととらえられていたといえる。懐風藻には、

煙光巖上翠。日影濬前紅(「遊吉野」藤原朝臣史)

「巖の上にもやの光が翠色にたちこめ、水際には日の光が紅色を帯びてうつつている」(『古典文学大系』による。以下、懐風藻の訓読、訳は同書による)。

とあり、水際に映った日の光が紅色を帯びていると表現している。この表現は日本人の日の光に対する捉え方が根底にあつてのものであると共に、懐風藻の性質から考えれば中国詩文から得た表現であることも考えられる。

中国詩文では日の光は「白日」と、「白」であらわされることも多い。それは昼間の日の光をさすこともあれば、次に示すように朝日や夕日もさす。

○ 朝霞迎_二白日_一丹氣臨_二湯谷_一(文選 張季鷹「雜詩」) 朝霞は白日を迎へ、丹氣は湯谷に臨む。―朝やけの

赤い雲が、東方に現われて日の出を迎える(『新釈漢文大系』による。以下、漢籍の訓読、訳は同大系による)。

○ 暮春和氣応 白日照_二園林_一(文選 張季鷹「雜詩」) 暮春に和氣応じ、白日は園林を照らす。

―晩春となって和やかな気がおこり、太陽の白い光が園の林を照らす。

○ 鷄鳴上林苑 薄暮小平津

長裾藻_二白日_一 広袖帯_二芳塵_一 (玉台新詠 吳均「擬古四首 其四」) 鷄鳴には上林苑、薄暮には小平津。長裾

白日に藻し、広袖芳塵を帯ぶ一鷄の鳴く朝の時刻には上林苑に、日暮れ時には小平津のあたりに遊び楽しむ。その折、美人の長裾は日の光にあやを散らし、広袖はかぐわしいほこりを帯びている。

一方、中国詩文で日の光を丹、紅と表現する例としては、

○ 遙看雲霧中 刻桷映丹紅 (玉台新詠 皇太子簡文「代樂府三首 其一」) 遙に看る雲霧の中 刻桷映じて丹

紅となるを一遠くから見ると、雲や霧の中に、彫刻されたたるきが日に映じて赤くまた紅に見える。

○ 依_レ帷濛_二重翠_一 帯_レ日聚_二輕紅_一 (玉台新詠 皇太子簡文「雜題二十一首 其三」)

帷に依りて重翠濛たり、日を帯びて輕紅を聚まる一この梁上の塵は、とばりにそうては濃い翠の色をもやもやとさせ、太陽の光を帯びては浅い紅の色をあつめている。

などにみえ、太陽の光を帯びて紅色に映えているさまが詠じられていて、中国詩文に日の光を紅と表現していることも当然ともいえるが指摘できる。

五

四一三九歌には二句切れなのか三句切れなのかという問題がある。最近でも『講談社文庫万葉集』、『集成』、『全注』などは二句切れ、『全集』、『釋注』、『新編全集』などは三句切れというように両説が行われている。二句切れとする場合の根拠として、次の類似歌が挙げられることが多い。

羈旅の作

黒牛の海紅にはふももしきの大宮人しあさりすらしも（七・一二一八）

砺波郡の雄神河の辺にして作る歌一首

雄神川紅にはふ娘子らし葦付取ると瀬に立たすらし（十七・四〇二一、家持）

一、二句目は四一三九歌によく似、四一三九歌がこれらの歌のあとに作られたことなどから四一三九歌と上二首の類似性は明かなように見える。四〇二一歌は家持が守として春の出挙のために諸国を巡業した時、砺波郡の雄神河の辺でみた光景を一二一八歌の詠に依って作ったので、これら二首は明かに影響関係にあり二句切れである。が上二首は黒牛の海、雄神川が紅色に照り輝いている光景を歌って、それは海辺や川辺の大宮人や娘子の赤い裳によつてのものらしいと、「らし」という推量の助動詞をもって結句とするという詠法で、橋本達雄氏が「しかるに当面歌は、仮りに通説のいうように『紅にはふ』で切ってみても、下三句はその説明とならず、まして推量でもない。同じ句法、同じ構成とはいえないのである。」（『万葉集の時空』、平十二年三月）と指摘するように、一二一八歌、四〇二一歌と四一三九歌は異質であり、四一三九歌の句切れのあり方の根拠に右の二首を参考にすることは適切でない。橋本氏は結局四一三九歌は初句、三句、結句の三段構成とするが、古くは山本憲吉氏も同じく三段構成説をとっている（『大伴家持』、昭四六年七月）。したがって四一三九歌の区切れについては三通りの考えがあることになる。三段構成説の場合は「春の苑。紅にはふ桃の花。下照る道に出で立つ娘子。」（山本論）、三句切れ二段構成説の場合は「春の苑に、紅色に色美しく咲いている桃の花」（窪田『評釈』）とか、「『春の苑』は『春の苑の』の意で『紅にはふ』に続き」（『釋注』）と解することになる。この場合、紅に「にはふ」のは「桃の花」である

ことは両説ともに変わりない。続く「照る」も桃の花の照り輝きをいうことになるが、「にほふ」を重ねて「照る」も桃の花の輝きをいうことになる。「紅にほふ」といつてさらに「下照る」というのは表現が重複するのではないだろうか。一首中に「にほふ」と「照る」という表現が重複する歌に、

館の門に在りて江南の美しき女を見て作る歌一首

見渡せば向つ峰の上の花にほひ照りて立てるは愛しき誰が妻（二十・四三九七、家持）
があるが、これは「にほひ照り」と熟語となつていてもので、「花がにほひ照り」で今の場合と異なる。

二句切れ二段構成説の場合はどうかというと、佐々木『評釈』では「花と少女との艶麗な照応を、『春の苑』
れなるにほふ」と大きく写し取つた」と、花と少女のいる苑の景を美しい眺めとして「紅にほふ」と表現したものと
とする。その意味では佐々木『評釈』は「紅にほふ」を桃の花に限定せず、花と少女のいる苑の眺めを「紅にほふ」
としているということになる。『全注』（青木生子）の「休止しながら第三句につゞく呼吸と意味合いもある」、「上
二句と下三句との、あでやかな色彩の映じ合い」、口語訳の「春の園は、まるで一面紅色に照り輝いている、その
桃の花の……」という説明から、『全注』では「紅にほふ」は桃の花の形容としていとれるが、「むしろそれ
だけではなく、春の花園全体をおおう華やかな印象をイメージ化する言葉」、「春ま盛りの花園は題詞にあるように、
夕暮れて、いよいよ『紅にほふ』華麗さを増しているはず」という指摘から、「紅にほふ」が単に桃の花の色だけ
に対していつているのではないといった解釈をしているととれる。『全注』の「夕暮れて、いよいよ『紅にほふ』
華麗さを増しているはず」という指摘は、そのことを明確に述べているわけではないが、題詞の「天平勝宝二年三
月一日の暮に」によつてのものである。作歌事情として「暮に」と明記した家持の心情をくみ取るならば、歌の
解釈、歌の読みに「暮に」は生かすべきであろう。既にみたように日の光は「にほふ」ということばで表現される

こと、日の光は赤系の色として捉えられていたこと、夕暮れの色ということであってみれば、その色合いを「紅にほふ」と表現したと考えることは決して不自然でないこと、すなわち「紅にほふ」は題詞の「暮に」の具体的表現なのだと考えて良いのではないだろうか。

したがって「春の苑」が「紅にほふ」で、「桃の花」が「照る」で、一句目と二句目は主語と述語の関係にあり、ここで句切れと考える。

六

この歌が中国詩文によるところ大であるということは題詞の「春苑」、「眺矚」という表現からして明白である。「眺矚」については先に触れたが、「春苑」についても小島憲之氏の、「春苑」は漢詩の例からいうと「春園」の方が一般的であるが、唐詩では「春苑」、「春園」両者の存在がみとめられ、家持の場合は『初学記』あたりに学んだかという指摘がある（「漢語享受の問題に関して」、前掲）。「桃李の花」についても同様といえる。桃と李を組み合わせ「桃李」とするのは中国詩文にはよくみえることで、漢詩のテーマともなっている。古代の文献にみえる「桃李」は、書紀では推古二四年正月「桃李、実れり。」に始まり、推古三四年正月「桃李、花さけり。」、舒明十年九月「霖雨して、桃李花さけり。」、天武九年正月「活田村に桃李実れり。」である。推古三四年正月の記事は蘇我馬子の死の記事の二行前にあることから、中西進氏は「『桃李』などと中国ふうに一組に述べられるところをみると、馬子の趣味で桃李が植えられていたのかもしれないと思われる。」と、馬子の時代、実際に桃と李が対になつて植えられていた可能性を指摘する（「万葉集の文化コンテキスト18桃」『月刊しにか』二一九、平三年九月）。その

可能性はあろうが、書紀に出現するさまをみても「桃李」の例は新しいといえる。懐風藻では「桃」は、

- ① 階前桃花映（美努連浄麻呂「春日、応詔」）
 - ② 春岫擘桃開（「三月三日曲水宴」山田史三方）
 - ③ 映浦紅桃（「暮春曲宴南池」序 藤原朝臣宇合）
 - ④ 園池照灼。桃李笑而成蹊（「暮春於弟園池置酒」序 藤原朝臣万里）
 - ⑤ 池明桃錦舒（「暮春於弟園池置酒」 藤原朝臣万里）
 - ⑥ 桃花曲浦輕（「上巳禊飲。応詔」背奈王行文）
 - ⑦ 桃花雪冷冷（「初春在竹溪山寺於長王宅宴追致辭」序 釈道慈）
- ⑦ 花舒桃苑香（「春日侍宴」 安倍朝臣広庭）
- とみえ、桃の花が照り映える、照り輝いて咲いているさま、桃の花の香など詠じられ多彩であるが「桃李」の例は④の一例だけである。万葉集の「桃李」の例はこの四一三九題詞のみで、大越寛文氏は「桃李花を、はじめて和歌の世界に取り込むことを試み、見事に成功した」ものとする（「家持の李花の歌」『四国大学紀要』四、平七年十二月）。いずれも中国詩文によつてのものであることはいうまでもない。
- 四一三九歌が具体的にどのような中国詩文の影響下にあるか、現在までに指摘されている中国詩文とその関係について挙げると次のとおりである。

桃李の例

○桃紅李白皆誇好、須得垂楊相發揮上（唐、劉禹錫「楊柳枝詞」）

○柳葉園花処処新、洛陽桃李応芳春（唐、駱賓王「艷情代郭氏答盧照鄰」）
 桃を乙女の美しさに譬える

○桃之夭々、灼々其華、之子于歸、宜其室家（毛詩、周南「桃夭」）

○南国有佳人、容華若桃李（芸文類聚 卷八六「李」。玉台新詠 卷一「南国有佳人」）

○金谷万株連綺薨、梅花隱処隱嬌鶯

桃李佳人欲相照、摘蕊藥牽花来並笑（芸文類聚 卷八六「梅」、随江総「梅花落詩」）

○腹臉若桃紅（玉台新詠 卷八「繁華応令」）

桃花の下道

○桃李不言、下自成蹊（史記 卷一〇九 李將軍列伝）

○嘉樹下成蹊 東園桃與李（文選 卷三三 阮嗣宗「詠懷詩」）

○初桃麗新采 照地吐其芳（芸文類聚 菓部上「桃」 梁簡文帝「詠初桃」）

○桃李成蹊徑 桑榆蔭道周（文選卷三〇 謝玄暉「和徐都曹」）

桃と乙女を並べ、花の下に出で立つ乙女を配する

○洛陽城東路 桃李生路傍 花花自相對 葉葉自相當 春風東北起 花葉正低昂 不知誰家子 提籠行採

桑織手折其枝 花落何飄颺（玉台新詠 卷一 宋子侯「董嬌饒一首」）

うらうらと暮れなずむ春の日差し

○遲遲暮春日 天氣柔且佳（芸文類聚 歲時部中・三月三日 晋陸機「三月三日」）

○遅遅暮春日 靄靄春光上（初学記 歳時部・春 随陽休之「春日」）

以上が従来指摘されてきたものだが、他にも歌全体の趣ということであろうならもつと多くの中国詩文との関係を指摘することができる。

また、四一三九歌の作より二年遅れるが、天平勝宝四年画とある鳥毛立女屏風（樹下美人図）のような大陸的な美意識に根ざした画も、その形成に影響を与えていて、四一三九歌は題詞といい歌といい、中国詩文、大陸的な美意識に彩られたものといえる。

家持が確かに見たものは暮春三月の夕べ、紅色に染まる越中守公館の庭（庭のみならず公館から見渡せる景を含めて）であり、その景に触発され、紅桃の花、桃の樹の下に出で立つ乙女を配した。それを家持は都を遠く離れた、春遅い越中の国で美の追究の結実として歌いあげた。

八

藤原朝臣麻呂は家持よりおよそ二十才ほど年長で、家持が青年に達したころ参議兵部卿、陸奥国持節大使などの任にあり、天平九年七月疫病により四三才で没し、没後太政大臣を贈られた人である。この麻呂はかつて家持の義母であり淑母である、坂上郎女と歌をかわした間柄にある（四・五二二―五二八）。懐風藻にはこの麻呂の漢詩と序を載せる。

五言。暮春於弟園池置酒。一首。并序

…宇宙荒茫。烟霞蕩而滿_レ目。園池照灼。桃李笑而成_レ蹊。既而。日落庭清。樽傾人醉。…

城市元無好。林園賞有余。：天霽雲衣落。池明桃錦舒。

：宇宙荒茫、烟霞蕩ひて目に満つ。園池照灼、桃李笑まひて蹊を成す。既にして、日落ち庭清く、樽を傾け人酔ふ。

城市元より好無く、林園賞づるに余有り。：天霽れて雲衣落ち、池明らかにして桃錦舒く。

時は暮春、池を配した園で酒宴が催され、「直に風月を以ちて情と為し、魚鳥を翫と為す」ほどのなみはずれた風流心を持ち合わせる麻呂は、酒を飲んだりして楽しく喜ばしい心をこの園池で晴らす。「園池は明るく輝き、桃や李の花が咲いてその下には自ら小道を作」り、「既にして、日落ち庭清」くある情景は、四一三九歌の世界に通ずるものである。桃と李が対になり「桃李」としてみえるのも懷風藻ではこの一例のみである。

暮春の季節、日暮れ時、雲が去った空、園池の美しい桃の花、桃李の木の下の小道、そういった光景が一体となり詩的世界を形成している詩文が麻呂の「暮春於弟園池置酒。一首。」によって既に作られていることを家持は知っていたはずであり、そうした世界を詩文ではなく、家持の表現、やまと歌に詠ずることは興味深く、発憤することであつたらう。

麻呂の序及び漢詩の表現はもとより中国詩文から得たものである。麻呂の序及び漢詩の他に家持もまた中国詩文をみすえていたことは、先に挙げた中国詩文とのかかわりによって明白である。中国詩文に日の光を紅ととらえている例のあることは前述したが、それは日暮れの色、夕日にこそ適しているといえる。「紅霞」は夕焼けの色をいい、唐・権徳輿「李中丞慈恩寺清上人院牡丹歌に和す」詩に「曲水亭の西、杏園の北、濃芳深院、紅霞の色」（『字通』）とあり、『大漢和辞典』には「紅霞」の項に「べに色のかすみ。くれなゐの夕焼」（韋充、餘霞散成綺賦「白日

欲_レ落、紅霞米」などの例をあげ、また「紅丟丟」の項に「朝焼け・夕焼けの空の色に用ひる（通俗編、状貌、紅丟丟）」とあり、夕焼けが紅であらわされるものがみえる。ただ、これらが四一三九歌の表現とただちに関わるというのではないだろうが、中国詩文に例のあることであり、また夕焼けの空の色、夕焼けにそまる夕方の景が紅色と表現されるということは、その色合いからいって自然な表現ともいえる。

四一三九歌が題詞も含めて中国詩文の世界に色濃く染められたものであり、中国詩文の撰取なくしてこの歌の形成そのものがありえなかつたということを考えて、「春の苑 虹にほふ」の詠出に中国詩文からのもっと直接的な享受の指摘が可能なのではないだろうか。玉台新詠は、四一三九歌の形成に大きくかかわった漢籍の一つだが、その中の「和_三呉主簿_二六首」（王筠）中に、

落日照 紅妝

落日照_三紅妝_一 挾_三瑟当_二窗牖_一 落日紅妝を照らす、瑟を挟みて窗牖に当たる。

寧復歌_三靡蕪_二 唯聞歎_三楊柳_一 寧ぞ復た靡を歌はん、唯だ聞く楊柳を歎ずるを。

結好在_三同心_一 離別由_三衆口_一 結好は同心に在り、離別は衆口に由る。

徒設露葵羹 誰酌蘭英酒 徒に設く露葵の羹、誰か酌まん蘭英の酒。

会日杳無_レ期 薜華安得_レ久 会日杳として期無し、薜華安んぞ久しきを得ん。

というのがある。この詩は「遠くを望みやつて、別れて久しい人に綿々の情を寄せる歌」で、一、二句は夕日の照る空をはるかに望み瑟をかかえて窓べによりそい思いにふける女性の姿が描かれている。「妝」は装いの意で化粧の意でもある。夕日が空を照らして紅色に染まっている情景を、紅の装い、紅の化粧をしていると表現している。

夕日が空を照らし紅色に染まっている。その空の紅の化粧は空だけでなくあたり一面に紅色を映じている。この「落日照紅妝」が醸し出す詩的世界は家持を魅了するものであり、家持の詩的感性を刺激したといえないだろうか。

「下照る道に出で立つ娘子」の「娘子」は、家持の妻ととらえ、越中守公館の庭に出で立つ坂上大嬢を歌ったと解する見方もある。確かにこの前年、天平勝宝元年七月、大帳使として上京し、十月か十一月に帰越した家持が妻坂上大嬢を伴ったようであるから、この時、越中国に妻は滞在したことになる。しかし、「娘子」がその下に出で立つ桃の花は実景でない。「娘子」もまた、現実的な妻とはいえない。森淳司氏が「家持の想出した風雅な美人像でそれはみな望郷の情が彼の詩心を動かしての作とみることができよう。」（『大伴坂上大嬢来越私見』『万葉学論攷』平二年四月）と述べるように、桃の花も娘子も詩心に動かされてのものである。玉台新詠の世界からいえば、家持が桃の花の「下照る道に出で立つ娘子」を配するのは「落日紅妝を照らす」中で、瑟―大琴―をかかえ窓べに寄りそう女性の姿に触発されてのものであつたらう。

紅に染まる夕べの光景を紅のよそおいとする表現に家持が感興を覚え、題詞の「暮」と「春の苑紅にほふ」をもつて「落日紅妝を照らす」の世界を歌詠化し、暮春の、やがてうつろう夕日に染まる越中守の屋敷の苑を遙かに眺め、そしてこれのみが家持が目にした光景で、その光景の中に咲き誇る桃の花を想定し、その桃の花が照り輝く桃の木の下に乙女を立たせた幻想的な歌を作り上げたといえよう。